

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第29輯

南大阪湾岸北部流域下水道事業に伴う

# 和泉寺跡

—— 発掘調査報告書 ——

1 9 8 8

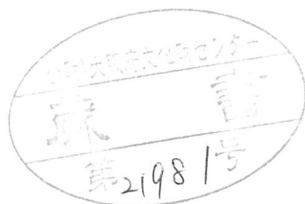
財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第29輯

南大阪湾岸北部流域下水道事業に伴う

# 和泉寺跡

—— 発掘調査報告書 ——



1988

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

# 序 文

和泉国には、いくつもの古代寺院が知られています。和泉寺跡も和泉国府に近接する同時代の古代寺院として古くから注目を集めていましたが、これまで調査事例もほとんどなく、その実体は明らかになっていません。古瓦の出土と条里等の復原から寺域が推定されているが、それも確たるものとはなっていません。しかし、今回の調査は推定寺域に近接することから和泉寺跡関連遺構遺物の発見を予想して調査を進めたしだいです。

今回の調査の結果については、本報告書に詳しく記述したところであります。奈良～中世にかけての古瓦片の出土は認められましたが、遺構は検出されませんでした。むしろ、弥生後期から飛鳥時代の遺構、遺物が発見され、遺跡としては和泉寺跡も包括して東西900m、南北1,200mの大規模な拡がりをみせる府中遺跡の拡がりの中で捉えておくべきことが明らかとなりました。また、中世和泉寺と近接して存在したという仏性寺を実証する手懸りを発見したことかと思われまます。

小さな報告書ではありますが、地域史の解明の資料として利用されることを大いに願って止みません。

最後に調査の実施にあたり、種々ご配慮いただきました大阪府土木部南大阪湾岸北部流域下水道事務所をはじめとする関係各位に謝意を表しますと共に、特に貴重な人材を直接派遣いただいています近畿府県教育委員会並びに大阪府下市町教育委員会に対し深謝申し上げます。

昭和63年8月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

理事長 浅野素雄



# 例 言

1. 和泉寺跡は和泉市府中町4丁目に所在する。当書は府中町4丁目760番地における、南大阪湾岸北部流域下水道事業に伴う和泉寺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は大阪府下水道部の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、財団法人 大阪府埋蔵文化財協会が実施した。
3. 現地調査および報告書作成は、協会の調査課第6班（班長富加見泰彦）が担当し、技師鈴木秀典が行った。
4. 調査面積は126㎡で、現地調査期間は昭和63年7月16日～8月25日である。現地調査において森本・福田共同企業体の協力と灰掛 薫氏（和泉市教育委員会）の教示を得た。
5. 調査地での測量は国土座標第VI系に基づき行い、水準値はT.P.値を用いた。
6. 遺構番号は遺構の種類にかかわらず、検出順につけたものである。遺構番号のあとの記号は遺構の種類を示し、協会の発掘調査規定に基づく。本書記載の記号は以下のとおりである。  
OO：土壌    OP：ピット    OR：河川    OS：溝
7. 土層色名は、小山正忠・竹原秀雄・財団法人日本色彩研究所『新版標準土色帖』1967によった。
8. 調査地は（財）大阪府埋蔵文化財協会の用いる地区割りのD-4-15-E-01-I F～I I、J F～J I、K F～K Iに位置する（第3図参照）。
9. 出土した遺物の総量はコンテナで4箱である。



## 本文目次

第1章	遺跡の概要	1
第2章	調査の方法と成果	4
第1節	調査の方法	4
第2節	層位と遺構面	5
第3節	遺構と遺物	7
第3章	まとめ	13

## 挿図目次

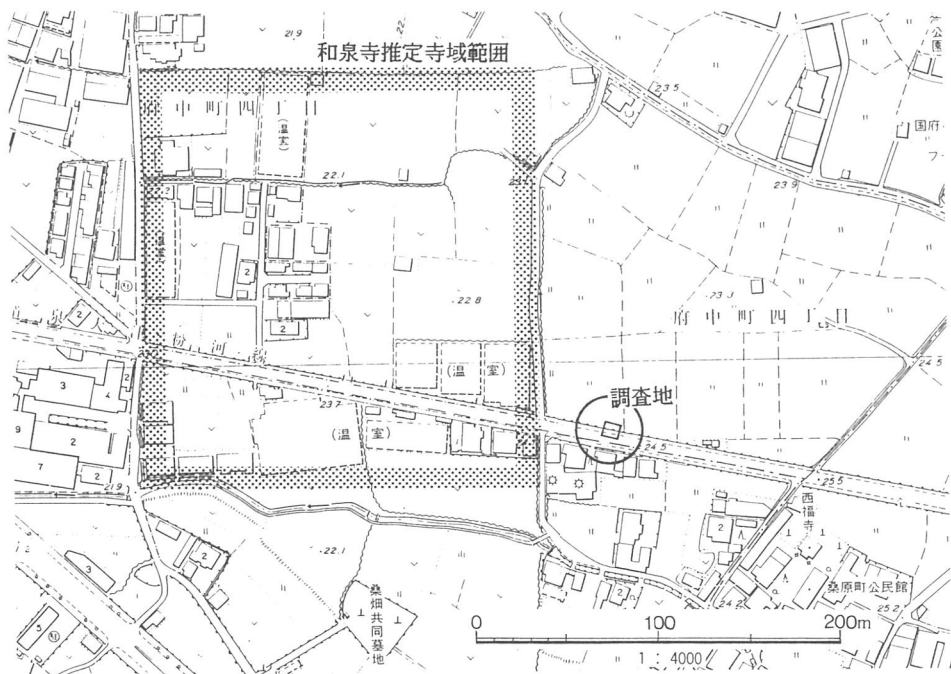
第1図	調査地位置図	1
第2図	和泉寺跡周辺遺跡分布図	2
第3図	(財)大阪府埋蔵文化財協会の地区割りと調査地の位置	3
第4図	層位模式図	4
第5図	西壁・南壁土層図	6
第6図	第Ⅲ遺構面の小溝群(写真)南東から	7
第7図	第Ⅲ・Ⅴ～Ⅶ遺構面遺構図	8
第8図	第Ⅷ遺構面遺構図	10
第9図	出土遺物	11

## 図版目次

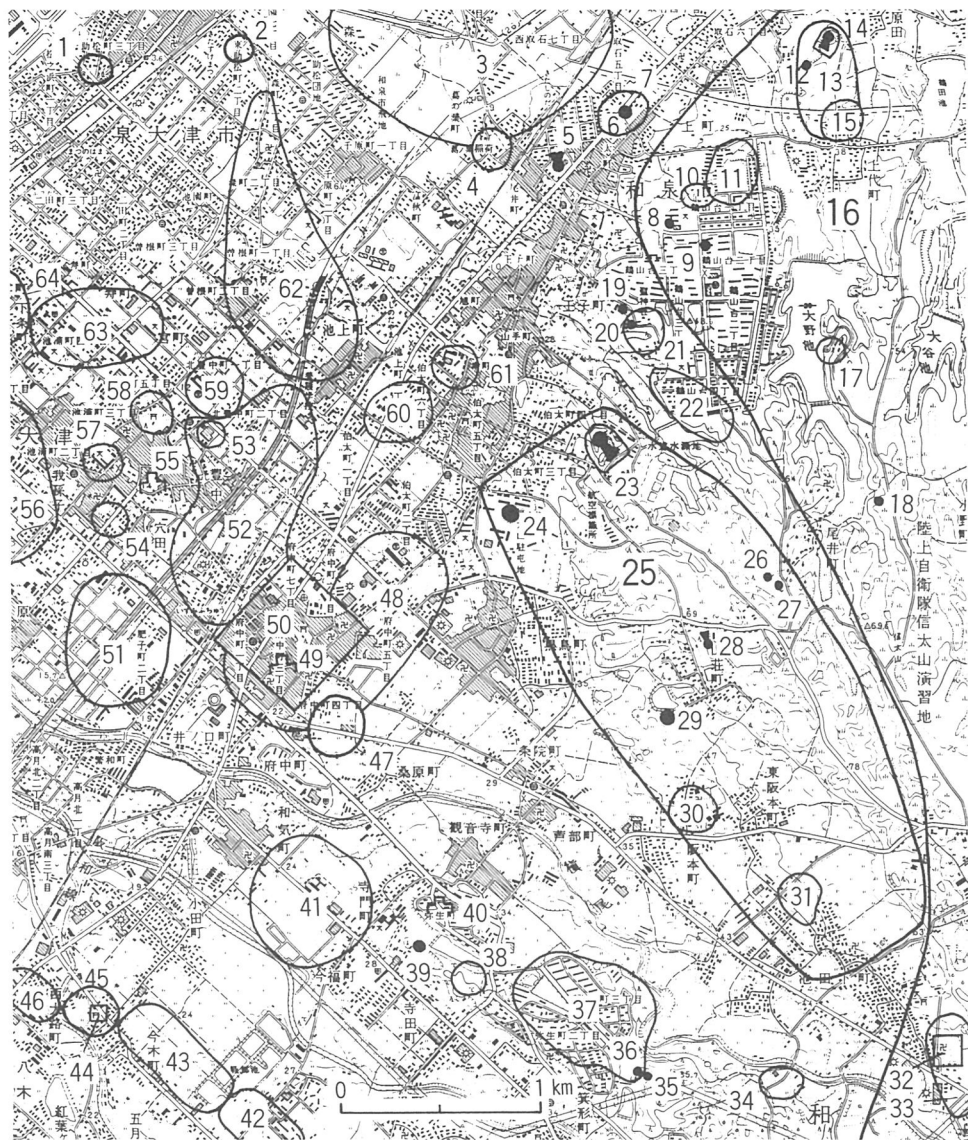
- 図版一 遺構 上 調査地全景（北西から）  
下 第Ⅱ遺構面 小溝群（北から）
- 図版二 遺構 上 第Ⅲ・Ⅴ～Ⅶ遺構面の遺構全景（西から）  
下 第Ⅲ・Ⅴ～Ⅶ遺構面の遺構全景（東から）
- 図版三 遺構 上 第Ⅷ遺構面 流路46-OR（西から）  
下 第Ⅷ遺構面 流路46-OR（北西から）
- 図版四 地層 上 西壁中央部中位の土層  
下 南壁東端部の土層
- 図版五 遺物 上 弥生土器  
下 須恵器
- 図版六 遺物 上 土師器・瓦・伊万里焼系染付磁器  
下 試掘出土の瓦・砥石

# 第1章 遺跡の概要

和泉寺跡は和泉市府中町4丁目に所在する。槇尾川の開析により形成された、いわゆる池田谷谷口の低位段丘上に位置し、南約300mには現槇尾川が北西方向に流れている。現地に残る約220m四方のほぼ真南北の方位の地割りと、採集された軒瓦から、2町四方の奈良前期～平安時代の寺院跡とされている。そして和泉国府に近接する位置から茅渟県主の氏寺として建てられたと考えられ、承和6年(839)の和泉国分寺創建以前は官寺に準ずる扱いを受け、国分寺が行うべき、公式仏事も行っていたと言われている。しかし、このような重要な寺であるらしいにもかかわらず、この寺跡に関する文献資料はなく、考古学的にも1982年に和泉市教育委員会による調査が1度行われただけである。池田谷内の坂本寺、池田寺といった同時期の郷名氏族の氏寺とは、それぞれ直線距離にして約1.7km、約3.3km隔たるに過ぎない。信太寺とは約4kmである。1982年の発掘調査は和泉寺推定寺域の西北部で行われた。この調査では耕土下約60cmの地山上で瓦などの少量の遺物が出土したが、遺構は検出されなかった。<sup>(註1)</sup>



第1図 調査地位置図



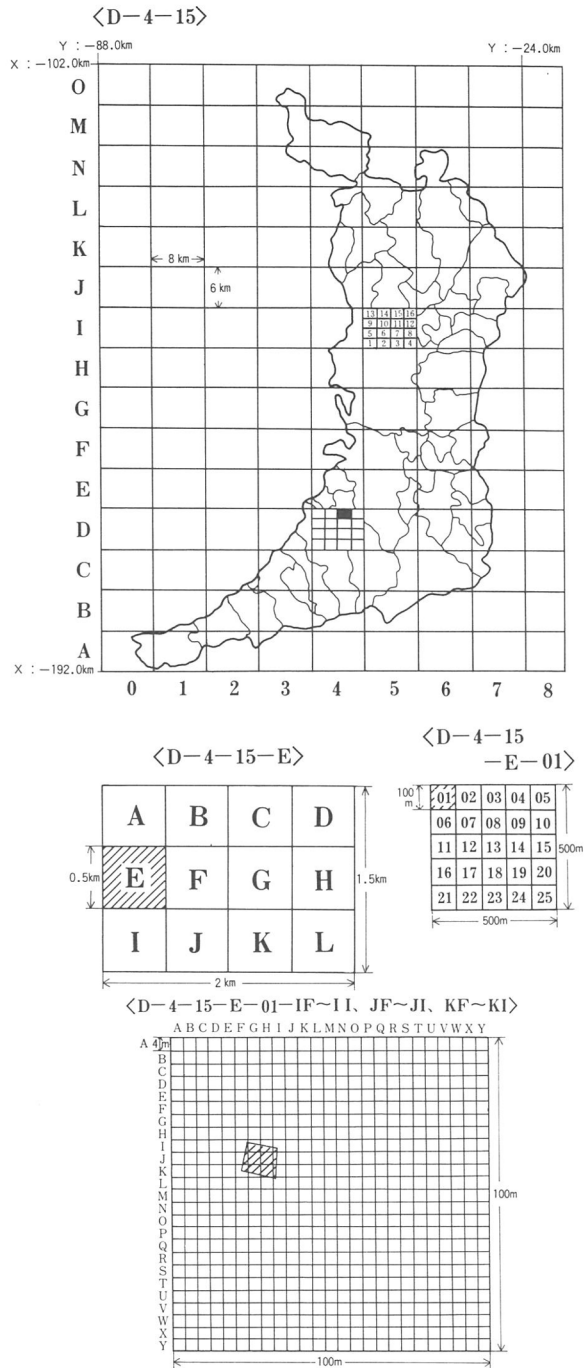
- |              |                |            |           |             |             |
|--------------|----------------|------------|-----------|-------------|-------------|
| 1. 助松遺跡      | 2. 森遺跡         | 3. 大園遺跡    | 4. 葛葉遺跡   | 5. 貝吹山古墳    | 6. カニヤ塚古墳   |
| 7. 上町遺跡      | 8. 菩提池古墳       | 9. 次郎池東古墳  | 10. 菩提池廃寺 | 11. 道田池古墳群  | 12. 番所塚古墳   |
| 13. 上代遺跡     | 14. 黄金塚古墳      | 15. 信太寺跡   | 16. 陶邑窯跡群 | 17. 大野池遺跡   | 18. 阿閑梨池西古墳 |
| 19. 聖神社 2号古墳 | 20. 聖神社境内 1号古墳 | 21. 聖神社遺跡  | 22. 惣ヶ池遺跡 | 23. 丸笠山古墳   | 24. 王塚古墳    |
| 25. 信太千塚古墳群  | 26. 原作 2号墳     | 27. 原作 1号墳 | 28. 狐塚古墳  | 29. 鍋塚古墳    | 30. 阪本寺跡    |
| 31. 願成遺跡     | 32. 池田寺跡       | 33. 池田寺遺跡  | 34. 池田下遺跡 | 35. B 26号古墳 | 36. B 25号古墳 |
| 37. 観音寺山遺跡   | 38. 寺門古墳・古墓    | 39. 狐塚古墳   | 40. 観音寺城跡 | 41. 和泉遺跡    | 42. 山ノ内遺跡   |
| 43. 軽部池西遺跡   | 44. 今木廃寺       | 45. 今木遺跡   | 46. 西大路遺跡 | 47. 和泉寺跡    | 48. 府中遺跡    |
| 49. 国府城跡     | 50. 和泉国府跡      | 51. 板原遺跡   | 52. 豊中遺跡  | 53. 大福寺跡    | 54. 穴田遺跡    |
| 55. 刈田城跡     | 56. 虫取遺跡       | 57. 薬師寺跡   | 58. 穴師遺跡  | 59. 七ノ坪遺跡   | 60. 伯太北遺跡   |
| 61. 伯太藩陣屋跡   | 62. 池上曾根遺跡     | 63. 池浦遺跡   | 64. 東雲遺跡  |             |             |

第2図 和泉寺跡周辺遺跡分布図

和泉寺跡の北方には縄文時代から中近世にかけての複合遺跡である府中遺跡が広がっており、和泉寺跡の北部も府中遺跡の範囲内とみられている。

今回の調査地は厳密には和泉寺推定寺域外に位置し、推定寺域南東隅から東へ約40m離れた地点である。調査は大阪府下水道部による南大阪湾岸北部流域下水道事業に伴うもので、調査地はシールド工法の発進口に当たる。調査面積は126㎡で、現地調査は昭和63年7月16日～8月25日まで行い、弥生時代中期から近世に至る遺構・遺物を検出した。

註1 灰掛 薫「和泉寺」  
『府中遺跡群発掘調査概要』Ⅲ  
和泉市教育委員会 1983



第3図 (財)大阪府埋蔵文化財協会の地区割りと調査地の位置

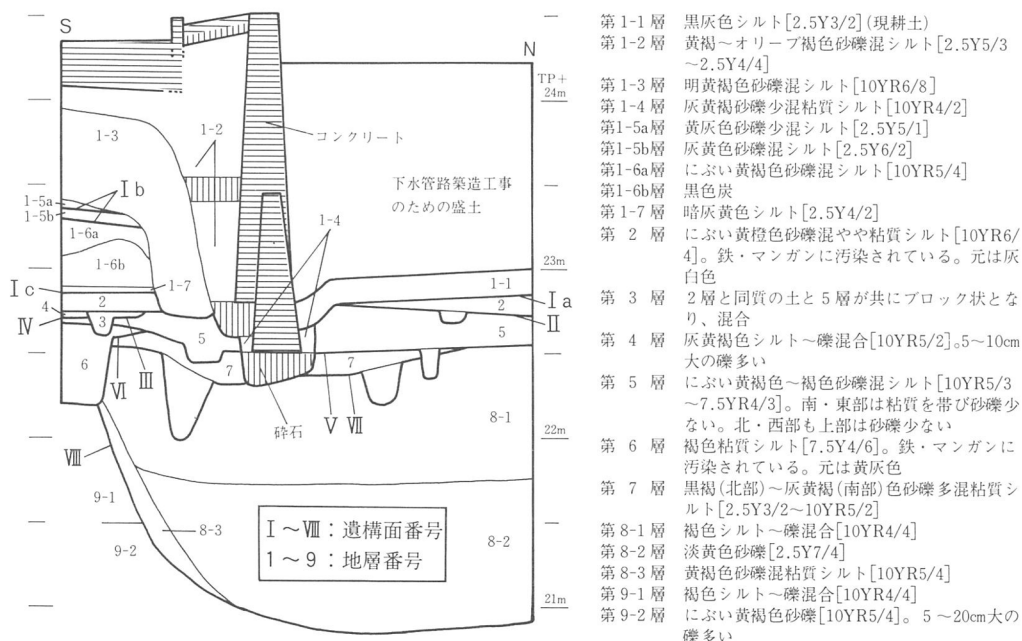
## 第2章 調査の方法と成果

### 第1節 調査の方法

当調査は、6月6日に行った試掘調査の知見に基づき実施した。試掘は調査地の西と東に各1箇所、重機により穴を穿ったもので、東の試掘坑では中世の遺構が確認され、瓦器・土師器小皿・瓦・砥石などが出土していた。

調査地は主要地方道泉大津粉河線東行き車線とその北の約1.5m低い畑地の両方にかかっているものであったが、調査開始時には迂回車線建設のため調査地周辺の北側の畑地も道路面とほぼ同じ高さに盛土されていた。ただし、調査範囲内では道路敷下も含め、盛土が除去され、畑地の耕土上面（後述の第1-1層）の高さで平坦になっていた。

昭和63年7月20日に耕土層の重機による掘削を行い、実質的な発掘作業を開始した。重機による掘削は、この耕土層と道路擁壁基礎部分について行い、それ以下は人力によって層位ごとに掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。掘削は四壁に矢板を用いず、素掘りで行



第4図 層位模式図

い、四壁には地層の状況により、任意の斜度の法面、あるいは段を設けた。

## 第2節 層位と遺構面 (第4・5図、図版四)

調査地における層位を模式図(第4図)で示した。地層は第1～9層に大別され、それらが細分された各層を上から順に第1-1層、第1-2層、第1-3層や、第1-4 a層、第1-4 b層のように表示した。第1～8層の各層の下面や層中でⅠ～Ⅷの遺構面を確認した。大別した各地層の番号とその層中及び下面の遺構面番号は一致している。一層で複数の遺構面がある場合、遺構面名は上から順に第Ⅰ a遺構面、第Ⅰ b遺構面、第Ⅰ c遺構面のように表記した。第9層以下は一応無遺物層と考えているが、確たる調査資料があるわけではなく、推定にとどまる。

調査地には模式図に示したように、多くの地層・遺構面が存在したが、実際の第2層以下の面的調査では、これらの地層・遺構面ごとの的確な掘り分けは困難で、遺構の検出も、遺構の判読が比較的容易な地層まで掘り下げた後に行ったことが少なくなかった。第Ⅱ遺構面遺構は第2層下面、第Ⅲ遺構面遺構は第5層中位、第Ⅴ遺構面遺構は第5層下面と第7層下面、第Ⅵ～Ⅷ遺構面遺構は第7層下面で検出し、遺構の調査を行った。

第1層は明治時代以降の地層と推定している。最初のコンクリート製擁壁は第Ⅰ b遺構面の時期にできているようだ。

第2・3層はそれぞれの下面における素掘りの小溝群の存在から耕土であったとみられる。第3層は第5層と第2層類似の土壌のブロックが混ざった地層である。

第4層は砂礫主体のシルト～礫の混合土で、5～10cm大の礫を多く含む。平面的には東端部の幅2～3mの範囲に6cm前後の厚みで存在した。これを河川の氾濫による堆積層とすれば、礫の大きさからかなり規模の大きな氾濫を想定せざるをえないが、道路敷などのために人為的に運ばれた可能性も強いと思われる。

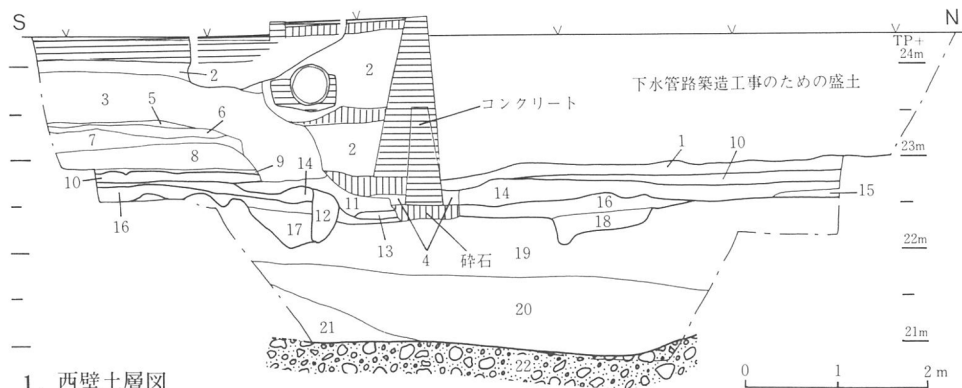
第5層は小さなブロック状の土の集合であり、耕作期間は短いものの耕土であったことが分かる。土質は第6層に酷似している。

第6層はブロック状の土を全く含んでいない最大厚70cmの均質なシルト層である。ラミナも見られない。ブロックが失われるほどに第7・8層を攪拌したとするには、これらの地層に多量に混じる砂礫を含んでおらず、河川氾濫時に後背低地に堆積した水成層の可能

性が高いと思われる。

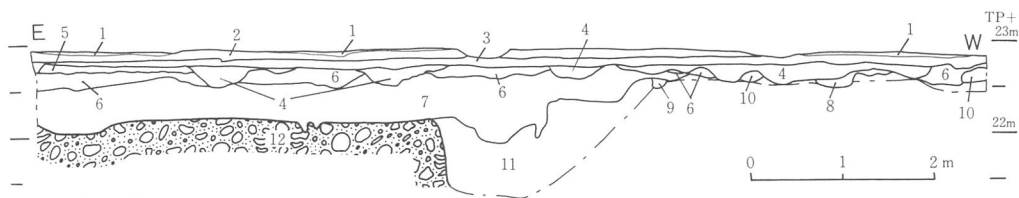
第7層は次節記載のように古墳時代後期の耕土の可能性ある。

第8層は弥生時代中期後半の流路46-O Rの埋土である。上部（第8-1層）と下部（第8-2層）で土質が異なり、第8-1層はシルト～礫の混合土、第8-2層はラミナをもつ明瞭な水成層である。流路の南肩には上から下まで粘質シルト（第8-3層）が貼



1. 西壁土層図

- |                                  |                                      |
|----------------------------------|--------------------------------------|
| 1 第1-1層 黒灰色シルト[2.5Y3/2]          | 12 第4層 暗褐色砂礫著多混シルト[10YR3/4]          |
| 2 第1-2層 オリーブ褐色砂礫混シルト[2.5Y4/3]    | 13 第4層 褐色砂礫多混やや粘質シルト[10YR4/4]        |
| 3 第1-3層 明黄褐色砂礫混シルト[10YR6/8]      | 14 第5層 におい黄褐色砂礫多混シルト[10YR5/3]        |
| 4 第1-4層 灰黄褐色砂礫少混粘質シルト[10YR4/2]   | 15 第5層 褐色砂礫多混シルト[10YR4/4]            |
| 5 第1-5a層 黄灰色砂礫少混シルト[2.5Y5/1]     | 16 第7層 黒褐色砂礫混粘質シルト[2.5Y3/2黒褐]        |
| 6 第1-5b層 灰黄色砂礫混シルト[2.5Y6/2]      | 17 第7層 褐色砂礫多混シルト[10YR4/4]            |
| 7 第1-6a層 におい黄褐色砂礫混シルト[10YR5/4]   | 18 第7層 におい黄褐色砂礫多混粘質シルト[10YR4/3]      |
| 8 第1-6b層 黒色炭                     | 19 第8-1層 褐色シルト～礫混合[10YR4/6]          |
| 9 第1-7層 暗灰黄色シルト[2.5Y4/2]         | 20 第8-2層 淡黄色砂礫[2.5Y7/4]              |
| 10 第2層 におい黄褐色砂礫混やや粘質シルト[10YR6/4] | 21 第8-2層 褐色砂礫[2.5Y4/6]               |
| 11 第3層 におい黄褐色砂礫多混シルト[10YR8/4]    | 22 第9-2層 黄褐色砂礫(10～20cmの礫多い)[10YR5/6] |



2. 南壁土層図

- |                                 |                               |
|---------------------------------|-------------------------------|
| 1 第1-6b層 黒色炭                    | 7 第6層 褐色粘質シルト[7.5YR4/6]       |
| 2 第1-7層 黄灰色砂礫少混シルト[2.5Y4/1]     | 8 第6層? 褐色砂礫少混粘質シルト[7.5YR4/4]  |
| 3 第2層 におい黄褐色砂礫混やや粘質シルト[10YR6/4] | 9 第7層 暗褐色砂礫多混粘質シルト[10YR3/4]   |
| 4 第3層 第2層と同質の土と第5層がブロックで混合      | 10 第7層 灰黄褐色砂礫多混粘質シルト[10YR5/2] |
| 5 第4層 灰黄褐色シルト～礫混合[10YR5/2]      | 11 第8層 褐色シルト～礫混合[10YR4/4]     |
| 6 第5層 褐色砂礫少混粘質シルト[7.5YR4/3]     | 12 第9-1層 褐色シルト～礫混合[10YR4/4]   |

第5図 西壁・南壁土層図



りついていた。

第9-2層は10~20cm大の礫を多量に含み、よほど大規模な河川氾濫でないと流れてこれ得ない土砂と思われる。

### 第3節 遺構と遺物 (第6~9図、図版一~六)

#### ●第II遺構面と第2層 (図版一)

ほぼ真北に方位をとる南北方向の小溝(幅15~40cm、深さ5cm以下)が、第4層の存在する東端部3mを除き、密に現れた。第2層からは弥生~室町時代の土器に混じり、伊万里焼系染付磁器(18世紀以降)が数片出土した。

#### ●第III遺構面と第3層 (第6・7図、図版二)

ほぼ真北に方位をとる南北方向の小溝1~4・17-O Sが心々で2m前後の間隔をおき、東西に並ぶ。溝の幅は60~70cm、深さは15~20cmである。埋土からは奈良時代の土師器・須恵器・瓦がそれぞれ少量出土した。

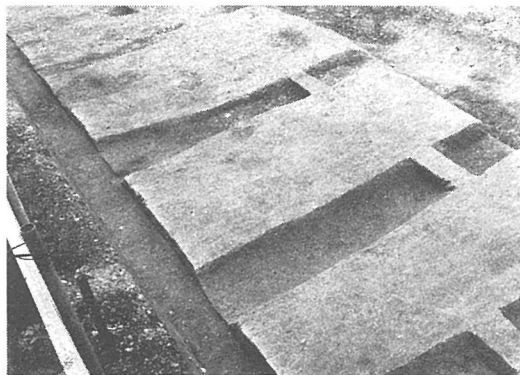
#### ●第IV遺構面と第4層

第4層は調査区の東端部2~3mの範囲にのみ分布する。その下面に遺構はない。ここであげる第IV遺構面の遺構は、西壁断面に現れたピット状(深さ60cm以上)と土壇状(深さ30cm以上)の落ちである。これらの遺構の形態は調査用排水溝と道路擁壁に壊され不明であるが、埋土は粘質を帯びるものの第4層に似る。これらは第4層堆積後に作られた第III遺構面の遺構の可能性も高いが、先にあげた第III遺構面の遺構と埋土が全く異なることもあり、この遺構面の遺構としてあげておきたい。

#### ●第V遺構面と第5層 (第7図、図版二)

第5層は第6層に酷似する土壤の小さなブロックの集合からなり、第6層を耕した土と思われる。極細砂のブロック状の混じりも多い。

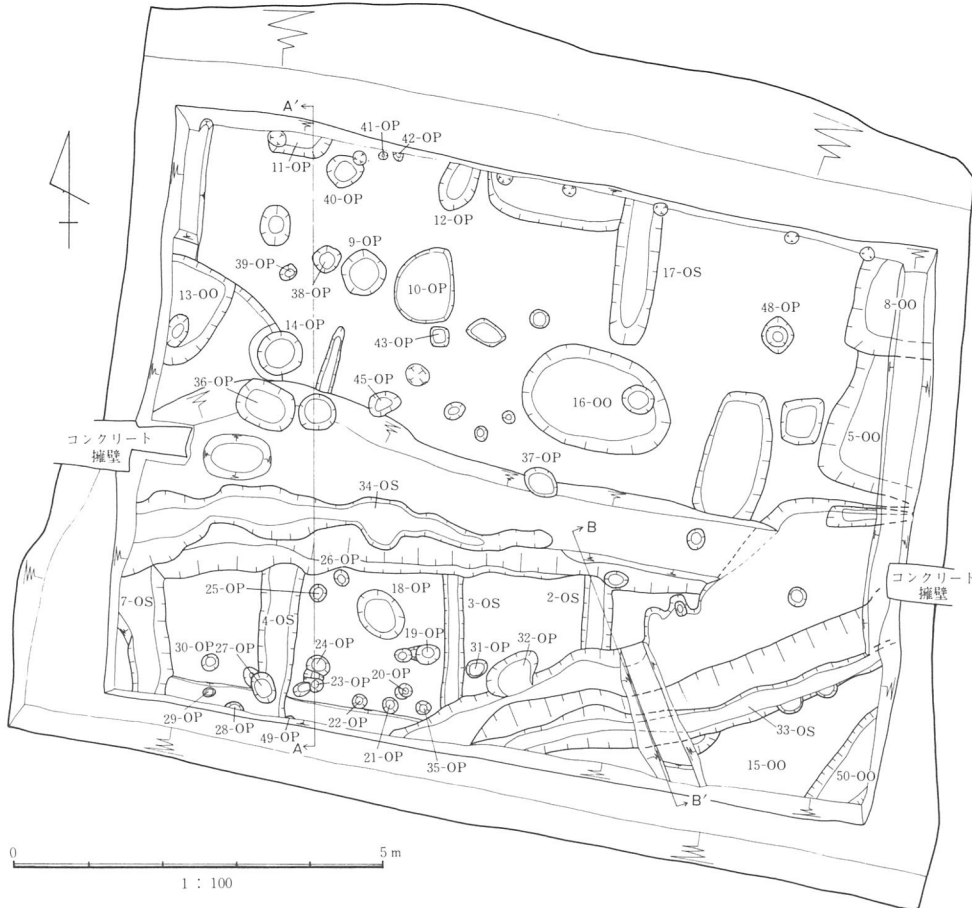
この面の確実な遺構には、5・8・



第6図 第III遺構面の小溝群 南東から

+ X : -168,531.000  
+ Y : -51,976.000

+ X : -168,531.000  
+ Y : -51,968.000

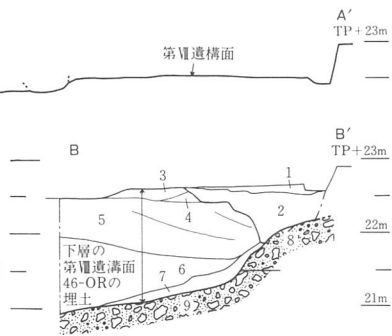


+ X : -168,544.000  
+ Y : -51,976.000

+ X : -168,544.000  
+ Y : -51,968.000



- 1 第 5 層 褐色砂礫混シルト[10YR4/4]
- 2 第 6 層 褐色粘質シルト[7.5YR4/4]
- 3 第 8-1 層 暗褐色シルト～礫混合[10YR3/3]
- 5 第 8-1 層 暗褐色砂礫多混シルト[10YR3/3]
- 6 第 8-1 層 暗褐色シルト～礫混合[10YR3/4]
- 8 第 8-2 層 褐色砂礫[10YR4/4]
- 7 第 8-3 層 黄褐色砂礫混やや粘質シルト[10YR5/6]
- 8 第 9-1 層 褐色シルト～礫混合[10YR4/4]
- 9 第 9-2 層 にぶい黄褐色砂礫[10YR5/4]



第 7 図 第Ⅲ・Ⅴ～Ⅶ遺構面遺構図

16-00、7-OS、9・27-OPがあり、前三者は第5層を埋土とする深さ10~20cmの浅い落ち込みである。7-OSは幅50cm前後で深さは10~20cmである。10~12・14・18-OPも上記の遺構との形態・埋土の類似からこの遺構面に属する可能性が高い。この遺構面のピットには径60cm前後の円形あるいは楕円形で深さ20~30cmのものが多く、埋土は褐~暗灰色砂礫若干混じり粘質シルトのものと、上部が暗灰色砂礫若干混じり粘質シルトで下部暗褐色砂礫多混シルトのものがある。遺構内からは飛鳥~奈良時代の土器が少量出土した。

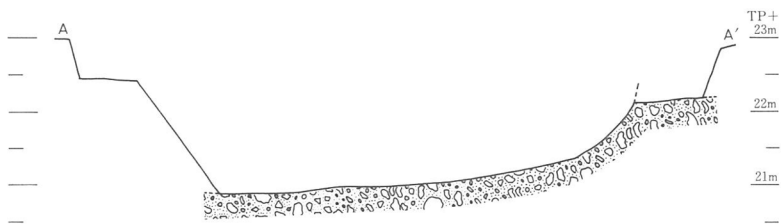
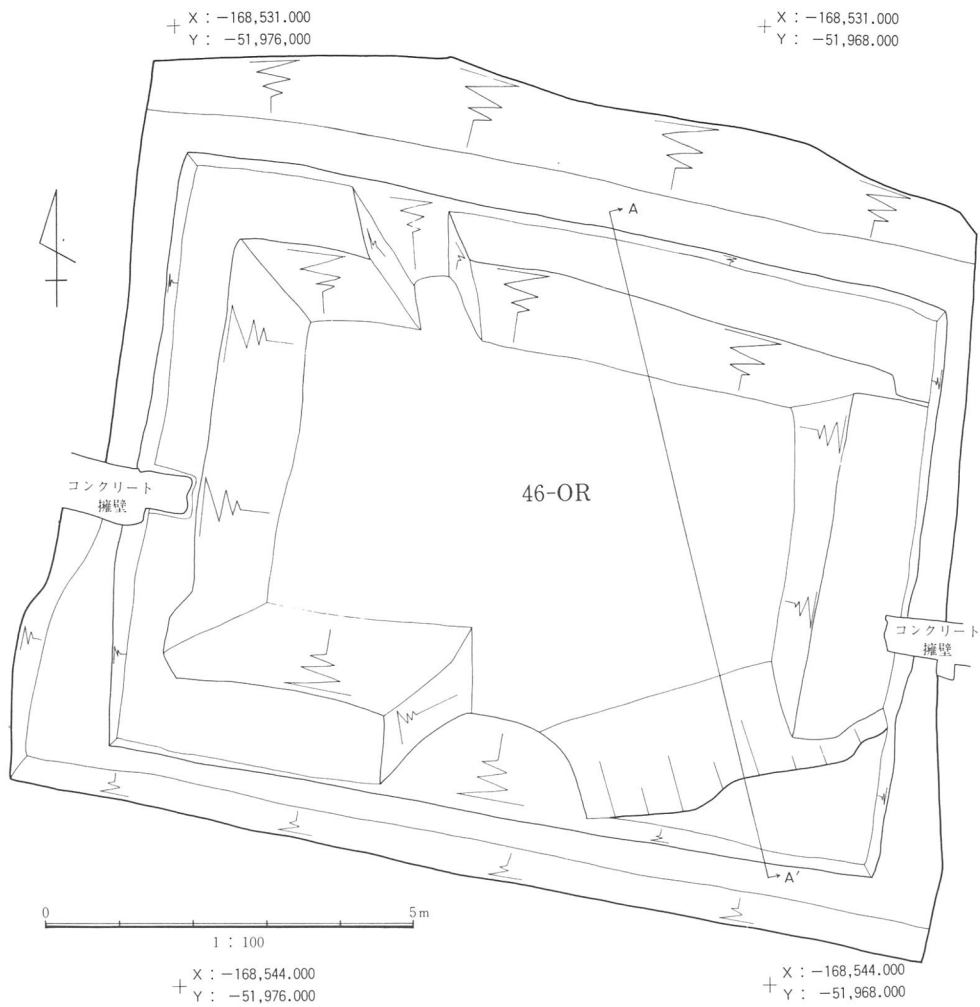
#### ●第VI遺構面と第6層（第7図、図版二）

この面の主要な遺構である15-00は調査区南東隅で北肩が検出されたもので、北から南へ2段に分けて段状に40cm下がり、その底は平らである。この底面では段のきわに幅40cm前後、深さ30~40cmの溝33-OSが東西方向に走り、調査区南東隅部には深さ15cmの50-00がある。

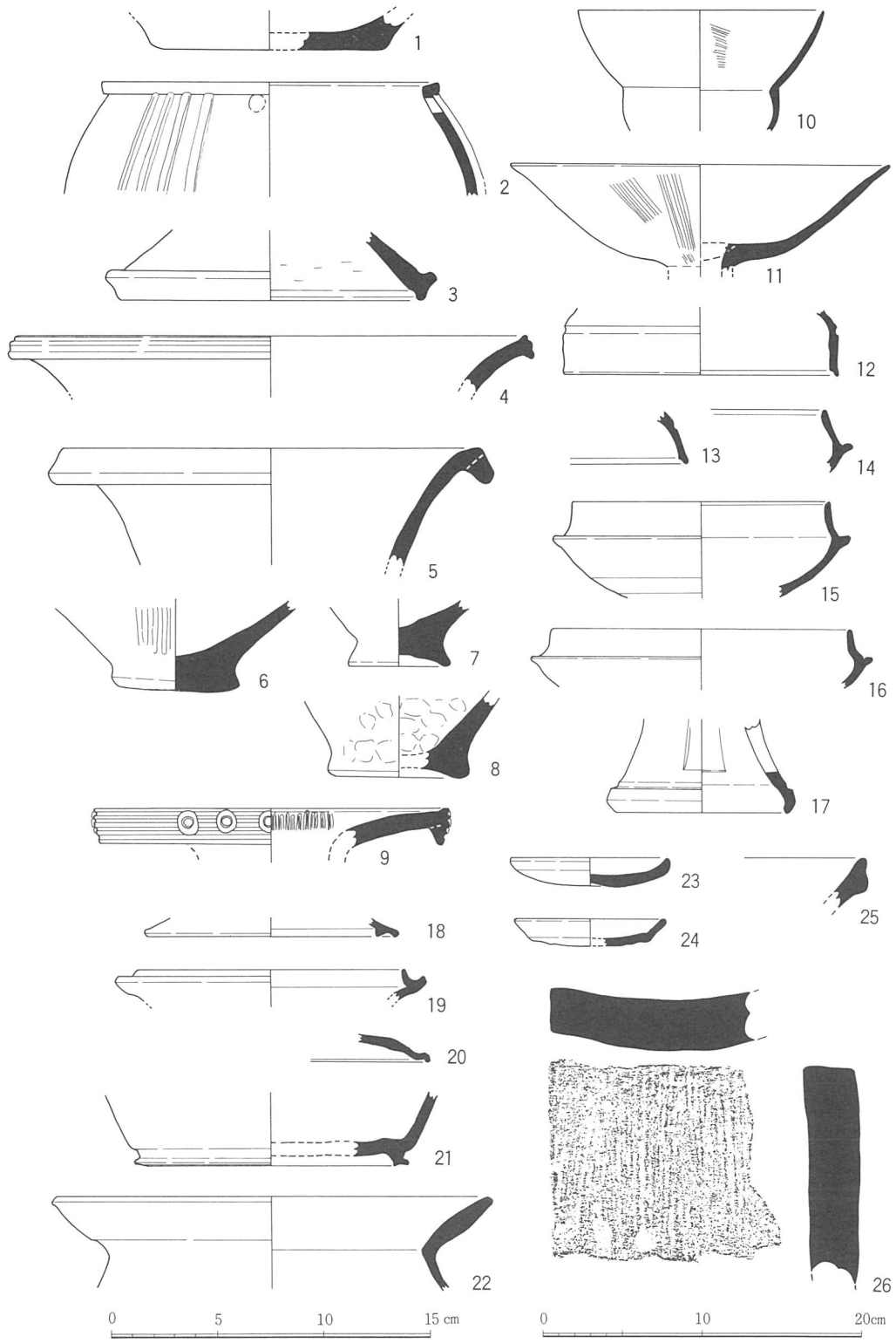
第6層は15-00や、15-00の下面で検出される33-OS・50-00などの遺構埋土にはほぼ限られ、遺構外へはごく部分的に広がるのみである。この地層は15-00の肩口で若干砂礫を含む以外は均一なシルト質の土壤で、これらの第6層を埋土とする遺構間で切り合い関係はみられない。15-00・33-OSの部分では合わせて70cmの層厚がある。遺構埋土からは6世紀後半の遺物が少量出土している。埋土が（灰黄）褐色砂礫若干混じり粘質シルト26・28・37・39・41・42・45・48-OPも遺物・層序から、第6層堆積前のこの遺構面の遺構と思われる。

#### ●第VII遺構面と第7層（第7図、図版二）

遺構の埋土は褐色が強く、砂礫を多く含む粘質シルトであり、13-00、19~24・29~32・36・40・49-OP、34-OSが、この遺構面の遺構である。遺物を出土する遺構は数少なく、遺物量も少ない。23-OP・34-OSは弥生時代後期の土器、13-00からは5~6世紀の須恵器・土師器が出土しており、第VII遺構面が弥生時代後期から古墳時代後期までの遺構を含むことが分かる。13-00は深さ20~40cmの土壤である。この遺構が第8層上面で検出されるため、13-00周辺の第7層は5~6世紀にできた地層とみられる。第7層が第8層および6世紀以前の堆積層を掘り起してできた地層である可能性は十分あるであろう。南西部の遺構には径20~30cm前後・深さ30~45cm前後の比較的深い柱穴が目につくが、調査範囲の制約もあり、住居跡として復元するには至らなかった。34-OSは北肩を道路擁壁工事で削られている。現状で幅1.2m・深さ20~35cmを測る。西端部は50



第 8 図 第Ⅷ遺構面遺構図



第9図 出土遺物  
 1~4 : 46-OR、6 : 34-OS、7 : 24-OP、9 : 1-OS、  
 11 : 13-OO、13 : 12-OP、15 : 48-OP、19 : 8-OO、  
 21 : 6-OS、23・26 : 試掘、他は包含層 (26のみ1/4、他は1/3)

cmと深い。

●第Ⅷ遺構面と第8層（第8図、図版三）

第8層は流路46-O Rの埋土である。調査区の南東隅に46-O Rの南肩を検出した。北肩は調査区の範囲外である。46-O Rは幅7.5m以上・深さ1.8mを測る。遺物は弥生時代中期後半の土器が約20片出土した。多くは流水のため表面が摩滅している。

●遺物（第9図、図版五・六）

遺物の総出土量は少ないが、弥生時代中期から現代まで各時代の土器がそれぞれ少量ずつ出土し、古代・中世の瓦も僅かではあるが出土している。しいて指摘すれば古墳～奈良時代の遺物が多い。遺物番号の1～26については図版五・六に写真を、第9図に実測図を示した。27～35については写真のみ掲げた。

1～4が弥生時代中期、5～8が弥生時代後期の土器である。1～4はすべて46-O Rから出土した。2の体部には棒状付文がある。5の胎土はいわゆる生駒西麓の土である。9は拡張した口縁部に4条の凹線文をめぐらし、上から竹管文をもつ円形付文を貼り付けている。10～17・27・28は古墳時代、18～22・29～32は飛鳥～奈良時代、23～25は平安～鎌倉時代の土師器・須恵器である。

26・35は試掘の時に中世の遺構から出土した。26の凸面には離れ砂と縄目のタタキが施されている。35は長辺12.5cmの砥石で安山岩製である。

### 第3章 ま と め

和泉寺跡として調査を行ったのであるが、寺跡そのものの遺構は確認できなかった。寺跡の時期とされる奈良～平安時代の遺構には、少数のピット・土壌と耕作に伴う素掘りの小溝群がある。また、この時期の瓦片は14片（600g）の出土であり、試掘の際に出土した中世の瓦8片（1685g）を含めてもごく少量といわざるを得ない。

遺構の主体を占めていたのは、弥生後期から飛鳥時代の遺構であり、时期的には和泉寺跡の北部から北方にかけて広がる府中遺跡で検出されている遺構と同時期である。当調査地の諸遺構もとりあえずは府中遺跡の広がりの中で捉えておくべきであろう。府中遺跡は府中町3丁目から伯太町2丁目にかけての東西900m、南北1200mの大規模な遺跡で、和泉市教育委員会・大阪府教育委員会による発掘調査で、縄文時代から中近世に至る遺構・遺物が数多く検出されている。<sup>(a1.1)</sup> 特に調査地の西北西600mの地点では弥生中期の住居跡、同後期の方形周溝墓群、古墳時代前～中期の住居域が検出されている。<sup>(a1.2)</sup>

試掘では離れ砂を施した中世の瓦が集中的に出土しており、付近に中世の瓦葺建物が存在するようである。三浦圭一は三重県名賀郡種生村常楽寺蔵の600巻の大般若経の奥書から、正元2年（1260）頃に、調査地付近に仏性寺という寺院が存在した可能性があることと、式内社和泉神社が和泉寺跡の近くにあったと言う伝承を『和泉市史』に記している。<sup>(a1.3)</sup> 三浦圭一の仏性寺推定地点は調査地とその東へ100mの間に残る、ほぼ一町四方の真南北方向の地割りの地域である。これらの当否は現状では不明といわざるを得ないが、中世の和泉寺跡を考えるにあたっては留意すべきことであろう。

註

- 1) 和泉市教育委員会『府中遺跡発掘調査概要』I～IV 1976・1978・1980  
和泉市教育委員会『府中遺跡群発掘調査概要』I～VIII 1981～1988  
大阪府教育委員会『和泉国府跡発掘調査概要』1966  
大阪府教育委員会『府中遺跡発掘調査概要』I・II 1985・1987
- 2) 高島 徹・松村隆文『府中遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会 1985  
藤沢真依『府中遺跡発掘調査概要』II 大阪府教育委員会 1987
- 3) 三浦圭一『和泉市史』第1巻 p.133・134・184 和泉市史編纂委員会 1965

圖

版

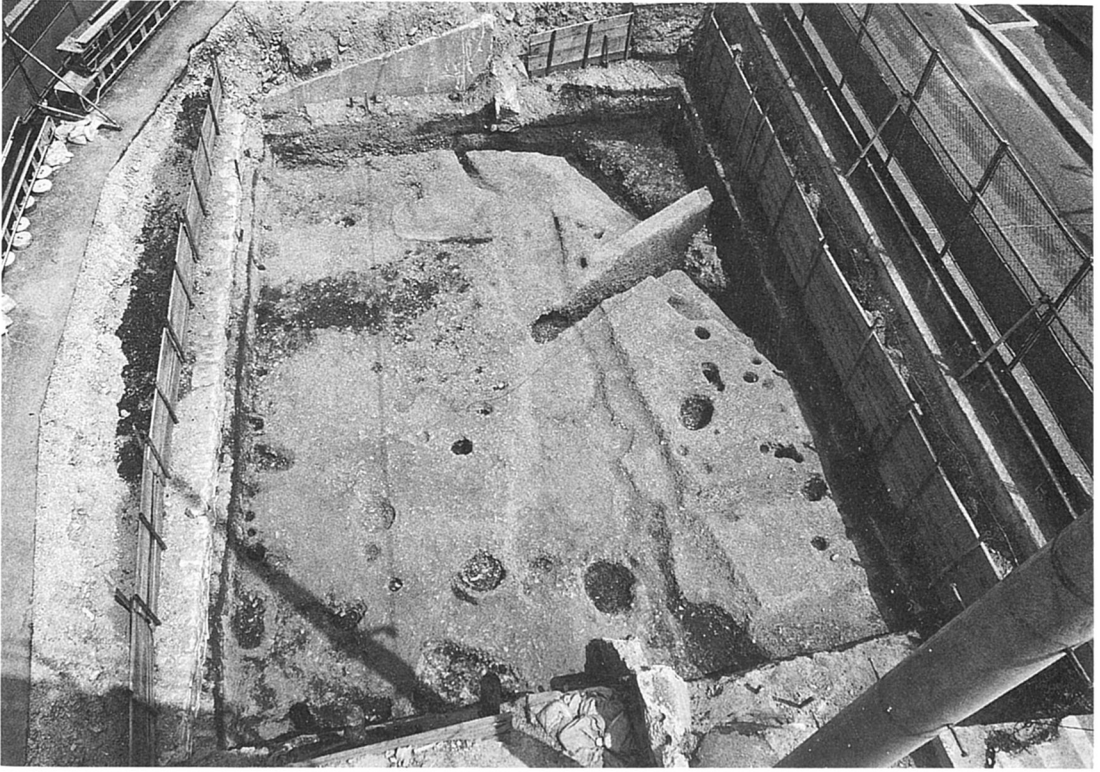




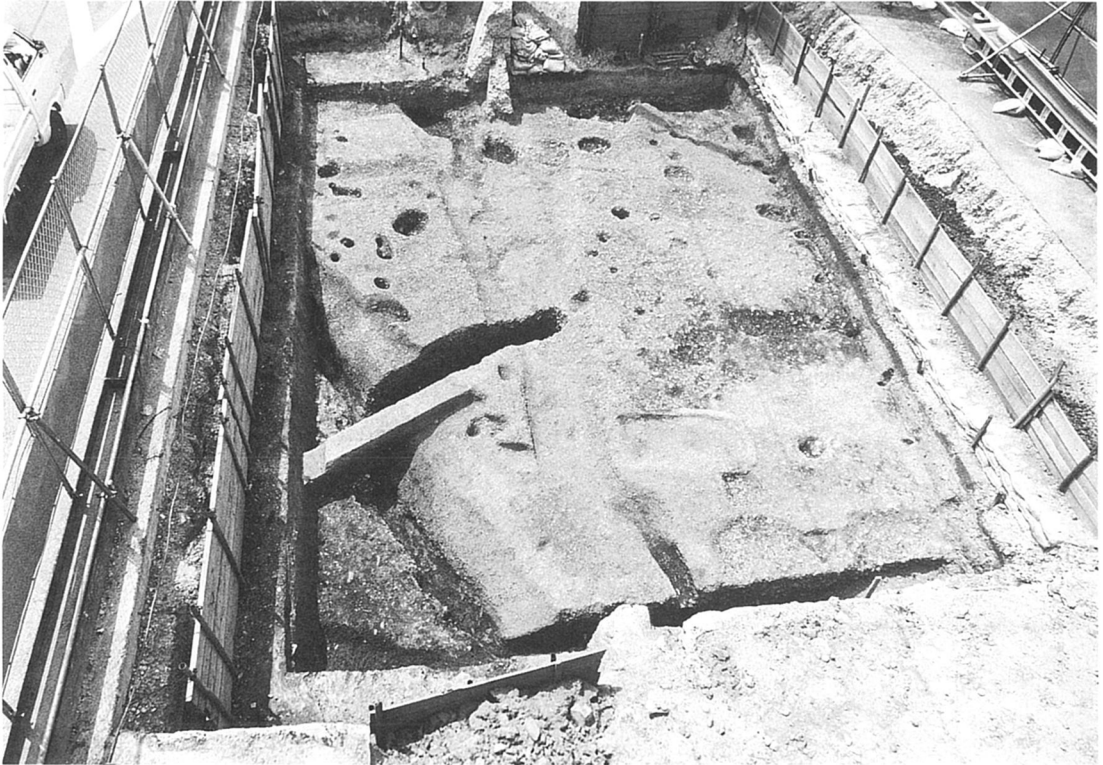
調査地全景（北西から）



第Ⅱ遺構面 小溝群（北から）



第Ⅲ・Ⅴ～Ⅶ遺構面の遺構全景（西から）



第Ⅲ・Ⅴ～Ⅶ遺構面の遺構全景（東から）



第Ⅷ遺構面 流路46-OR (西から)



第Ⅷ遺構面 流路46-OR (北西から)

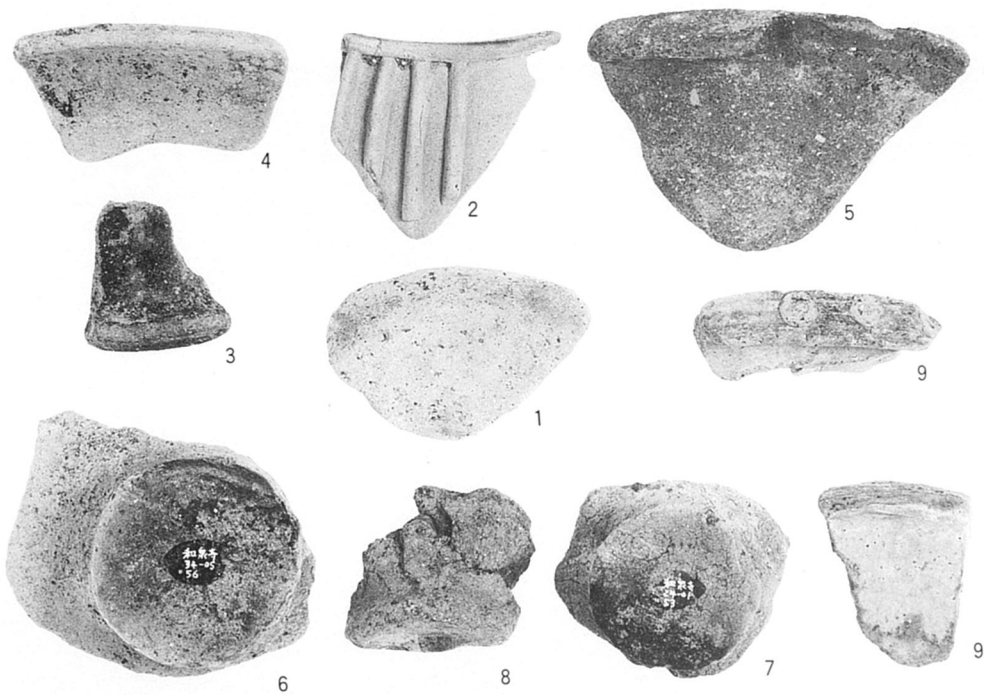




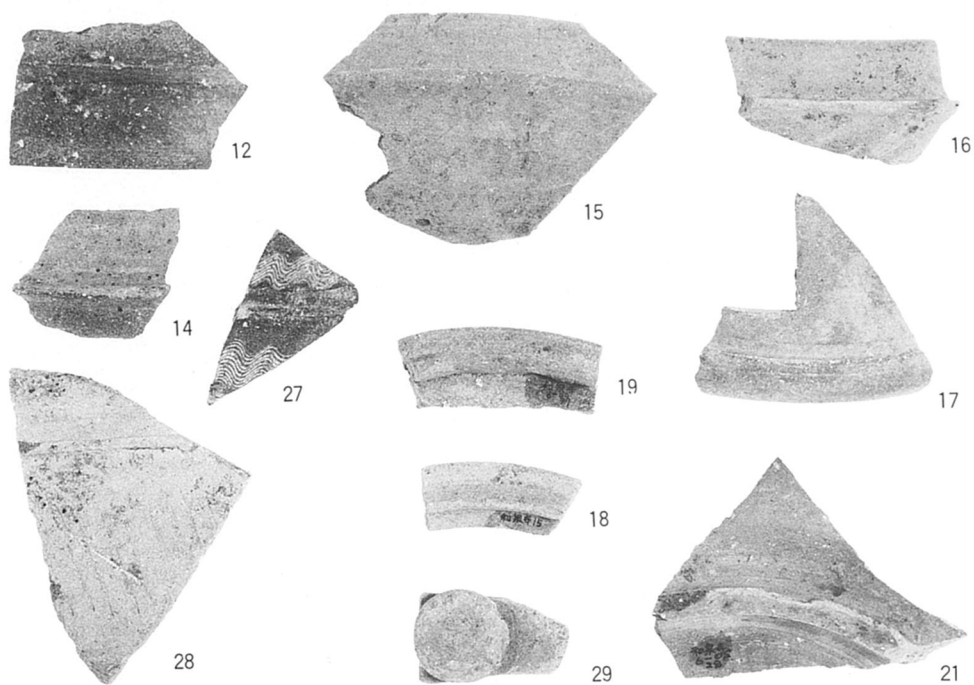
西壁中央部中位の土層



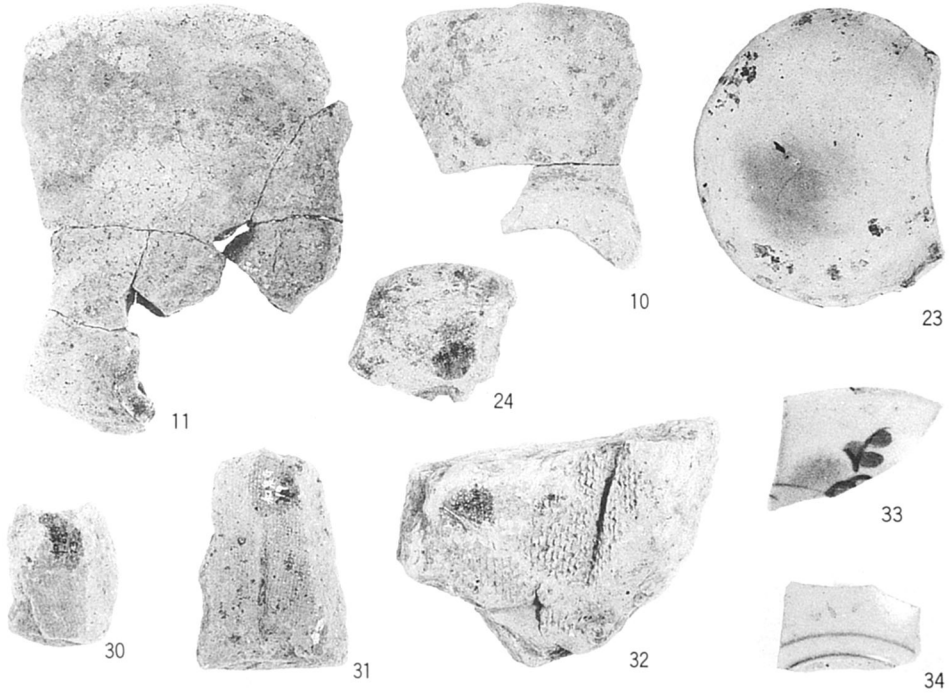
南壁東端部の土層



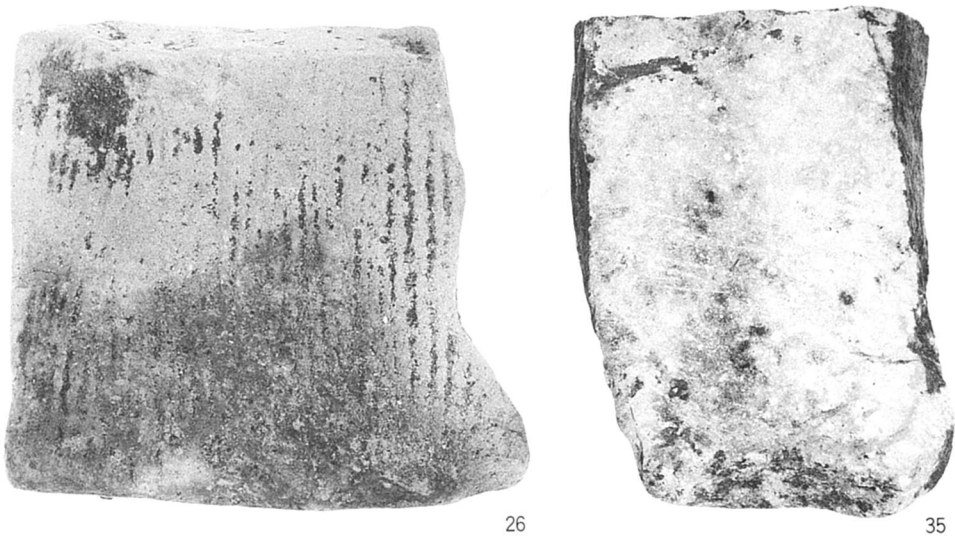
弥生土器



須恵器



土師器・瓦・伊万里焼系染付磁器



試掘出土の瓦・砥石

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第29輯  
南大阪湾岸北部流域下水道事業に伴う

# 和 泉 寺 跡

—発掘調査報告書—

昭和63年 8 月31日

編集・発行 財団法人 大阪府埋蔵文化財協会  
大阪市東区谷町2丁目36番地大手前ウサミビル  
印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所